



これからも、皆さんに喜んでいただけるものを提供し続けていきますー

**広島バラ園**  
たかしら・めくむ  
田頭 恵さん (50歳)

「庭に植えるバラは、うまく育てれば10年は持ちます」と田頭恵さん。秋のバラの開花は9月下旬～10月上旬頃。夏場にしっかり株を育て、花を咲かせる準備をしています。

広島バラ園で育種したオリジナル品種 (一部)

写真\_1 「ローズふくやま」。明るいピンク色。福山市の花にバラが制定されたのを記念して育種したものに、一般公募で命名され誕生。写真\_2 「ラインハルト プッシュ」。ドイツの育種家である友人の名を冠している。黄色にピンクの縁取りの大輪のバラ。写真\_3 「紅鹿の子」。ドイツ名「シュテファニー ガボット」。友人ラインハルト プッシュさんの孫の名を冠したバラ。鮮やかな赤い地色に白～ピンクの絞りで、2003年バーデンバーデンカジノ賞受賞。



紅鹿の子



ラインハルト プッシュ



ローズふくやま

# オンリーワンの産地であるためにー

バラでまちづくりを進める福山市の活動を縁の下で支える人が、廿日市にいる。友田でバラの苗専門店「広島バラ園」を営む田頭さんだ。2003年、ドイツで行われたバラの新品種コンクールでは、総合2位を受賞。オンリーワンのバラを手掛ける田頭さん親子に、その思いを伺ったー。



**広島バラ園**  
たかしら・かずぞう  
田頭 数蔵さん (85歳)

**広島バラ園**  
廿日市市友田91番2号  
田頭数蔵さんが、終戦直後1本のバラに出会い、その美しさにひかれ、バラ園を作ることを決意。昭和44年に友田に移転。栽培総面積3500坪の農地でバラ苗の生産と新品種の生産を行う。年6000株を出荷。

「小さい頃、近所でバラを作っている人がいて、『こんなにも美しいものが世の中にあるのか』と思ったのがすべての始まりです」。そう語るのは田頭数蔵さん。当時広島市に住み、16歳のとき原爆が投下。広島市内は焼け野原となった。そして18歳のとき、その人から1本の鉢植えのバラをもらったことで、

苗を植えましたね」と、当時を振り返る。また、「ローズふくやま」、「プリンセスふくやま」など、「ふくやま」と名のつくバラは現在9種類ある。その内に数蔵さんが育種した新品種は4つを占める。特に「ローズふくやま」は、昭和60年に福山市の花にバラが制定されたのを記念して育種したものに、一般公募で命名され誕生。そのほか、「厳島」「レツドひろしま」など、地元ゆかりの名を冠した品種も多く作り出している。

数蔵さんは、日本だけでなく世界でも有名な育種家でもある。数蔵さんが育種した「紅鹿の子」という品種は、2003年ドイツで行われたバーデンバーデン国際コンクールでカジノ賞(総合2位)を受賞。「新品種のライセンズが厳しいドイツで受賞できたのは、ドイツの育種家である友人との交流があったからです」と話す。

ドイツ名でシュテファニーガボットと名付けられた「紅鹿の子」は、その友人の孫の名前だそう。ドイツ国内には数蔵さんが作った新品種がたくさん出回っているとのこと。「交配した種子3000粒から、1つでできればいい方です。」

「当時、自分に花の師匠はおらず、純粹にバラを楽しむために始めました。その後、さまざまな種類の花にも挑戦しましたが、やはりバラにはかないませんでした」。その後、広島市で「新庄バラ園」を立ち上げ、温室を使った本格的なバラ苗の販売を始めた。

「小さい頃、近所でバラを作っている人がいて、『こんなにも美しいものが世の中にあるのか』と思ったのがすべての始まりです」。そう語るのは田頭数蔵さん。当時広島市に住み、16歳のとき原爆が投下。広島市内は焼け野原となった。そして18歳のとき、その人から1本の鉢植えのバラをもらったことで、

現在、息子の恵さんと二人三脚でバラの産地を盛り上げている。主に苗の育成に携わるのが恵さんだ。蜂ヶ峰総合公園(山口県和木町)にあるバラ園にも約15年前から苗を収めている。「バラは植えて終わりではなく、その後の管理が大変なんです。手を抜けば病気になったり、枯れてしまいます。しかし、丁寧に育てると、こちらの気持ちに見事に応じてくれるんです」と恵さんは笑顔で話す。

「よく『苗半作』(良い苗を育てることは、収量の半分が保障されたようなものである)と言います。だからこそ苗を売る私たちは全身全霊を苗に込めています」。

佐伯農業者クラブにも在籍していた恵さんは、地域の農業者と関わりながら、その発展にも尽力している。「良いものを作りたい、提供したいと思う気持ちで今までやってきました。その結果が今につながっています。これからも、買っていただいた方に喜んでいただけるものを提供し続けていきます」。